

シュヴァイツァーにおける幸福と倫理の諸問題

岩井 謙太郎

(和文要旨)

本論においては、幸福の問題、とりわけ、幸福と倫理の関係性の問題が、シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) の生への畏敬の思想とどのように連関しているのかについて論じる。その際、従来の既刊著作『文化と倫理』(*Kultur und Ethik*)のより詳細な理解のために、シュヴァイツァーの遺稿『生への畏敬の世界観』(*Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie*)等も併せて考察する。

具体的には、一章で、シュヴァイツァーが考察する幸福論を概観し、そこにおける問題の所在を、とりわけ、幸福の快樂説が孕む問題点を確認する。次いで、幸福と倫理の関係性の問題を、シュヴァイツァーが人間観として論じていることを検討する。

次いで、二章では、シュヴァイツァーが、倫理的原理の成立の可能根拠として、自己の生の肯定、自己の生の否定、他の生の肯定、他の生への献身的行為という一連の構造を分析していることを考察し、自己の生の肯定が、生への畏敬の神秘主義にもとづいて生じうること、自己の生の否定が、自己の罪責の反省的自覚とも言うべき自己自身に対する「誠実性」への努力から生じうること、そして、自己肯定的要素が他者肯定と不即不離であることを論じる。それによって、生への畏敬の媒介において倫理と幸福の両者が共に分かちがたく結びついていることを明確化する。

(SUMMARY)

This paper looks at the question of happiness and investigates any relationship happiness might have with ethics as portrayed in Albert Schweitzer's hallmark philosophy "Reverence for Life." In order to do that, we must first obtain the most accurate understanding of Schweitzer's thought as revealed in his work *Culture and Ethics* (*Kultur und Ethik*). This, in turn, is best achieved by examining Schweitzer's posthumously published work *A World View of Reverence for Life* (*Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor den Leben, Kulturphilosophie*).

The first chapter lays out a general outline of Schweitzer's philosophy of happiness and confirms the existence of the problem of inferiority with regard to the theory of happiness as

pleasure. The paper then considers Schweitzer's examination of the happiness-ethics relationship through a humanistic perspective.

Chapter two considers Schweitzer's four-part construct of 1) self-affirmation, 2) self-repudiation, 3) affirmation of the other and 4) committed action for the life of the 'other' as possible grounds for the realization of a 'first principle' of ethics and argues that 1) self-affirmation is premised upon a mystical reverence for life, 2) self-repudiation stems from one's effort at obtaining purity—the very striving for which proceeds from a reflective self-awareness mired in an accumulation of guilt, 3) the self-affirmative element is a necessary precondition to achieve affirmation of the other. As a result, it becomes clear that ethics and happiness are virtually inseparable elements in Schweitzer's philosophy of Reverence for Life.

はじめに

本論においては、幸福の問題、とりわけ、幸福と倫理の関係性の問題が、シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) の生への畏敬の思想とどのように連関しているのかについて論じる。その際、従来の既刊著作『文化と倫理』(Kultur und Ethik) のより詳細な理解のために、シュヴァイツァーの遺稿『生への畏敬の世界観』(Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, kulturphilosophie) 等も併せて論じることとする⁽¹⁾。

⁽¹⁾ シュヴァイツァー(Albert Schweitzer)の遺稿『生への畏敬の世界観』(Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben 1998)—(第一分冊 1931 年-1933 年：第二分冊 1933 年-1937 年：第三分冊 1939 年-1941 年：第四分冊 1943 年-1945 年)—は、1931 年から 1945 年にかけて、彼が叙述したものを、ギュンツラー(Claus Günzler)とツルヒャー(Johann Zürcher)が編集したものである。ギュンツラー(Claus Günzler)によれば、遺稿『生への畏敬の世界観』という表題は、仮題(Arbeitstitel)であり、体系的な意味においては、世界観として「生への畏敬」を、シュヴァイツァーは論じることができなかったとされる。そもそも体系とは何かが問題になると思われるが一構造主義と実存主義の関係性の問題とも連関している—シュヴァイツァー自身も、遺稿『生への畏敬の世界観』について、「本書は混沌としている」と述べ、本書について断片的素描であることを認めている。ここでは、詳細に論じることができないが、シュヴァイツァーが論じる生への畏敬の世界観は、生への畏敬の倫理の反省的自覚(意識的自覚)に先立ち、西欧の倫理思想、世界の諸宗教において、世界観としての生への畏敬が、構造化されていることを検討していると解釈しうるのである。確かに、時間的プロセスにおいて、生への畏敬の倫理を個々人が自覚(意識)する際には、世界観として構造化された生への畏敬は、個々人が生への畏敬を自覚化(意識化)した後に、発見されうるが、しかし、構造的には、世界観としての生への畏敬が先所与されているので、生への畏敬の倫理を個々人が自覚(意識)することが可能になると言えよう。つまり、構造化された生への畏敬の世界観と、個々人が自

具体的には、一章で、シュヴァイツァーが考察する幸福論を概観し、そこにおける問題の所在を、とりわけ、幸福の快樂説が孕む問題点を確認する。次いで、幸福と倫理の関係性の問題を、シュヴァイツァーが人間観（人間に存する自己中心性と他者中心性の関係性）として論じていることを検討する。次いで、二章では、一章で展開された問題から、シュヴァイツァーが、倫理的原理の成立の可能根拠として、自己の生の肯定、自己の生の否定、他の生の肯定、他の生への献身的行為という一連の構造を分析していることを考察し、自己の生の肯定が、生への畏敬の神秘主義にもとづいて生じうること、自己の生の否定が、自己の罪責の反省的自覚とも言うべき自己自身に対する「誠実性」への努力（自己の内的完成的要素）から生じうること、そして、自己肯定的要素（自己否定的要素）が他者肯定（他者献身）と不即不離であることを論じる。それによって、生への畏敬の媒介において倫理と幸福の両者が共に分かちがたく結びついていることを明確化する⁽²⁾。

一. シュヴァイツァーの幸福論

人間が幸福を求める存在であるということは古今東西において一応承認し得ることであろう。しかし、幸福とは何か（幸福の内容）について万人が一致しうよう定義することは困難である。また、仮に幸福の内容について相互の共通理解が生じたとしても、各人の無制限な自己の幸福の追求が相互に衝突することで却って相互に不幸を招くという事態も生じうるであろう。そのためには幸福の問題はそれだけで自己完結せず、幸福と正しい行為（倫理）の関係性について考察することを避けることができない。この問題を先鋭化して問うたのは哲学者カントであることは周知の事実である。

覚化（意識化）する生への畏敬の倫理は、循環関係（動的構造）に存すると解釈しうるのである。また、既刊著作では展開されていなかった内容も、遺稿『生への畏敬の世界観』においては様々な主題のもとに展開されている。ギュンツラーも指摘するように、既刊著作『文化と倫理』におけるのとは異なった、ソクラテス、ヒューム、功利主義に対する肯定的評価、ニーチェに対する否定的評価、また、神秘主義と宗教と哲学の関係、諸宗教と近代ヨーロッパ哲学の連関の考察、人類の精神史における世界哲学の構想等を挙げることができる。私見では、シュヴァイツァーの遺稿は、既刊著作を補完するものと考え、既刊著作の理解を深めるために、遺稿を積極的に再解釈（再構成）すべきであると考え。Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, kulturphilosophie III*, Erster und Zweiter Teil., C.H.Becksch Verlagsbuchhandlung, München, 1999, S.18-28.

⁽²⁾ シュヴァイツァーの邦語研究文献については、金子昭「シュヴァイツァー その倫理的神秘主義の構造と展開」、白馬社、1995年参照。笠井恵二「シュヴァイツァー その生涯と思想」、新教出版社、1989年参照。

シュヴァイツァーもカントの影響を多大に受けたが、カントとは異なる視点から、すなわち、自己の生と他の生の連帯関係（生への畏敬）を基に、幸福と倫理の関係性を考察するのである⁽³⁾。

シュヴァイツァーによれば、人間の理性は幸福と正しい行為との間の関係性を問う存在であるとされる。

「人間の理性は、幸福になることと、正しい行為との間という二つの根本的な問いと関わっている。」⁽⁴⁾

それでは幸福についてシュヴァイツァーはどのように考察しているのでしょうか。彼は、幸福論を展開する前に、幸福を快楽と考える学説について論じている。シュヴァイツァーも、幸福に快楽的要素があることを否定していない。ただし、彼は「自然的快楽が決して持続しない」⁽⁵⁾ ことを問題視する。自然的快楽とは、本能的快を含む文化的快全般のことであるが、とりわけ、シュヴァイツァーは、外的要因によって与えられた快楽は持続しないことを懸念する。換言するならば、外部から与えられた快楽によって、快の享受者は、一旦は快楽を享受する。確かに、彼は外的要因によって与えられる幸福を否定してはいない。しかし、その享受に慣れ、享受者において、快楽が持続しえず、幸福を快楽（快楽の享受）と考えるならば、常に快の充足は不満足なものになるのである。その点に、シュヴァイツァーは、幸福の快楽説の難点を見て取るのである。また、上述の点とも連関するが、彼は、私たちの快楽の体験には必ずしも因果関係を見いだせないことを懸念する。つまり、シュヴァイツァーは、帰結としての快楽の体験（結果）は必ずしも、それに値するような対応物（原因）を見出すことができない偶然の産物であることを指摘するのである。換言するならば、彼

⁽³⁾ カントにおける幸福と倫理の問題は、最高善を巡る徳福一致の問題、義務と傾向性の問題等様々存するが、その点については以下を参照。氷見潔『カント哲学とキリスト教』、近代文芸社、1996年参照。量義治『宗教哲学としてのカント哲学』、勁草書房、1990年参照。量氏はカントにおいて道德の原理は幸福の原理とは区別されているものの、両者は関係性を有することを論じている。「カントの真意は、道德の原理のゆえに幸福の原理を否定し去ることではなくて、前者を根本的な第一原理とし、後者をこれに従属する原理として認めることである。幸福の原理を第一原理とすることは許されないが、第一原理としての道德の原理が貫かれるかぎりにおいて、幸福の原理は認められるのである。重要なことは、両原理の主従関係を明確にすることであって、いずれか一方によって、他方を否定し去ることではない」。(同上、225頁) また、シュヴァイツァーのカント思想からの受容については以下を参照。H.Clark, *The Philosophy of Albert Schweitzer*, pp.22-24.

⁽⁴⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III, Dritter und Vierter Teil.*, C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.20.

⁽⁵⁾ Ibid., S.23

は快樂の体験（幸福の体験）は、それに値する行為の帰結によって必然的に生じるものではないことを指摘する。ここでは指摘するにとどめたいが快樂の質も問題になっていると思われる。

「私たちの幸福の体験にはいかなる因果関係も存しない。私たちは、不可視の出来事の状況に応じて、私たちを圧倒するような幸福感情を私たちの内に引き起こすという驚きを常に認めざるをえないのである。」⁽⁶⁾

このように、幸福を快樂と規定すると様々な難点が生じるのであるが、シュヴァイツァーによれば、古代ギリシアの思想家エピクロスも、自身の快樂説を最後まで貫徹できなかったとされる。エピクロスは、苦悩が生じる拠り所を欲望と規定する。というのも、欲望は人々の願望を駆り立てるが、その願望は完全な形においては満たされることがないからである—しかし、人間はそれを満たすために、欲望によって駆り立てられる—。そこから、欲望の追求による快樂の享受には持続性がなく、必要最小限の快樂の享受に留まることこそが、心の平静を満たす快樂である—欲望によって駆り立てられる苦痛を最小限にすると言う意味—という快樂概念（幸福概念）にのみ留まったとされる⁽⁷⁾。

「自然的快樂による各々の充足は、自然的快樂の止揚を私たちにもたらすのである。」⁽⁸⁾

「最大の可能性、最大の享受としての福利としての幸福についての素朴な表象は私たちの背後に沈んでしまうのである。」⁽⁹⁾

彼はエピクロスの主張について詳細に論じていないので、古代哲学研究の碩学ロング(Anthony A. Long)の説に依拠して、シュヴァイツァーの主張の妥当性について確認してみよう。ロングによれば「欲求に関するエピクロスの分析は、苦痛からの解放が最大の快樂であるとする原則と一致」⁽¹⁰⁾ するとされる。また、肉体的な欲求の追究には限りがないが、精神がそれを統御することによって、「心の平静」という「静的快樂」

⁽⁶⁾ Ibid., S.23.

⁽⁷⁾ キケロ、永田康昭・兼利琢也・岩崎勉訳『キケロー選集 10 善と悪の究極について』、岩波書店、2000 年。本書（善と悪の究極について 1 巻・2 巻）において、キケロがエピクロスの快樂説に対して疑問を投げかけている。

⁽⁸⁾ Ibid., S.23.

⁽⁹⁾ Ibid., S.23.

⁽¹⁰⁾ A.A. ロング(Anthony A Long)、金山弥兵訳『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懷疑派—』、京都大学学術出版会、2001 年、100 頁。

を得るとロングはエピクロスを解釈する。さらに、ロングは、エピクロスにとって、ギリシアの伝統的な倫理的徳（思慮、正義、節制、勇氣）は快樂の手段としてのみ価値を有することを指摘し、倫理とは自己だけで完結するものではなく他者（社会）とも密接に関連していることから、エピクロスの快樂主義の思想は以下のように自己中心性を免れていないことを考察する。

「人々が追究すべき快樂は、ベンサムの『最大多数の最大幸福』ではない。エピクロスは、他者の利益を行為者自身の利益より優先すべきであるとか、他者の利益を行為者の利益とは独立に評価すべきである、とはけっして勧めない。彼の快樂主義の方向性は、完全に自己中心的なのである。」⁽¹¹⁾

シュヴァイツァーもロングと同様にエピクロスの快樂説が自己中心的な幸福観念に留まっている点を批判しているので、一応シュヴァイツァーのエピクロス解釈は妥当であると言えよう。

ただし、シュヴァイツァーも人間が自己中心的な幸福観念から容易に脱却しようとは考えていない。その点について、彼は以下のように人間の現実を把握する。

「大きな問題は以下のことにある。すなわち、人間はエゴイスティックな衝動、自己保持の衝動からどのように脱却することができるのかに存する。」⁽¹²⁾

シュヴァイツァーは、私たちにおいては、善なるものと衝動的なものが併存し、自己中心性と他者中心性の傾向が共に存することを考察する。そして、倫理を非エゴイズム、非倫理をエゴイズムと称し、私たちが両者の緊張関係から逃れることができないことを以下のように指摘する。

「エゴイズムと非エゴイズムは、私たちの内に併存している。どんなに私たちが努力してもエゴイズムから十分逃れることはできない。」⁽¹³⁾

エゴイズムを克服するために私たちが真剣に努力したとしても、自己の生存を維持するためには他の生を犠牲にしなければ生存を確保しえない等の悪において、完全にエゴイズムを克服することができないので、シュヴァイツァーは上述のように主張するのである。ただし、このような人間の悪（罪責）を彼は洞察しつつも、人間をエゴ

⁽¹¹⁾ 上掲書 104 頁。

⁽¹²⁾ Albert Schweitzer, *Strassburger Vorlesungen, Historisch-kritische Theologie und Naturwissenschaft*, C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 1995, S.704.

⁽¹³⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.179.

イズムの存在には還元しない。というのも、完全なエゴイズムを貫徹しうる人間は存在しないからである。

「私たちは全くのエゴイズムでもなく、全くの非エゴイズムでもありえないということが、私たちの本質に与えられている。何らかの仕方で、いつかあるとき、冷酷無情な者も、他者と共感し、他者に助力する欲求に屈服するのである。」⁽¹⁴⁾

このように、シュヴァイツァーはいわば性善説（非エゴイズム）にも性悪説（エゴイズム）にも与しないのであるが、彼は両者の混合説を取らず、両者を区別した上で、エゴイズムを克服することを倫理と考えるのである。

「私たちは、倫理を、私たちを自己自身のための存在から脱却することを促進する、非エゴイズムとして自覚する。」⁽¹⁵⁾

倫理について考察する際に、人間の本性をエゴイズムと捉えるか、非エゴイズムと捉えるか等については、東西の思想史上様々な見解が展開され、容易に解決されうる問題ではないが、そのような見解の中から、人間の本性をエゴイズムに還元し、倫理を断念（エゴイズムの克服の断念）する思想も登場したとされる。

「非倫理的な生命観は、エゴイズムに生きることを根本原理に高めうる。というのも、エゴイズムに生きることは、直接的な仕方で、我々に本性的であるからである。」⁽¹⁶⁾

しかし、先述したように、シュヴァイツァーは、人間の本性の両義性（エゴイズムと非エゴイズムの併存）を強調しつつも、倫理の断念を承認しない。否、彼は、積極的に倫理を構築することを試みるのである。シュヴァイツァーは「倫理が非倫理を凌駕する」⁽¹⁷⁾ことを前提に、倫理（非エゴイズム）と非倫理（エゴイズム）の相互関係性を認識するのである。

「非倫理は、それが依存している樹木の寄生植物のように、倫理を前提する。」⁽¹⁸⁾

二. シュヴァイツァーの倫理的視座

一章で考察したように、幸福と正しい行為（倫理）の関係性を、エゴイズムと非エゴイズムの問題としてシュヴァイツァーは展開したが、二章においては、この問題に

⁽¹⁴⁾ Ibid., S.179.

⁽¹⁵⁾ Ibid., S.180.

⁽¹⁶⁾ Ibid., S.182.

⁽¹⁷⁾ Ibid., S.180.

⁽¹⁸⁾ Ibid., S.183.

対するシュヴァイツァーの倫理的視座について検討する。彼によれば、正しい行為（倫理）とは、公共の福利を増進し、共同体の成員が相互に尊敬の念を払うような社会が構築されることにありとされる。ただし、このような正しい行為を実現するためには、外面的な制度改革（組織改革）を遂行するだけでは不十分であり、私たちの内的な生への意志を洞察し、そこを起点に倫理的原理を構想することをシュヴァイツァーは要求するのである。それでは私たちの生への意志は基本的にどのようなあり方をしているのであろうか。彼の見解に従えば自己の生の肯定に起点が存するとされる。

「生の肯定は私たちの内に本性的に与えられている。私たちは、生への意志である。生を体験し、十分生きぬく衝動が私たちの本質である。」⁽¹⁹⁾

シュヴァイツァーによれば、自己の生の肯定こそが「幸福になることへの憧れ」⁽²⁰⁾を構成するのであるが、自己の幸福を実現するためには、私たちは自己の生の肯定（自己幸福の追求）だけではなく、他の生をも肯定する必要があるとされる（他者幸福の追求）。というのも、私たちが幸福になるためには、自己だけでは不十分であり、常に他者を必要とするからである。その点についてシュヴァイツァーは以下のように指摘する。

「倫理の根本的な事実は以下の点に存する。すなわち、私たちは私たちの生を十分生きることができないということである。何らかの仕方で、何らかの程度において、私たちは他の生と連带的であると感じるのである。」⁽²¹⁾

つまり、私たちが幸福を実現するためには、自己の生の全面的な肯定を放棄し、自己の生を否定することも要求されるのである。というのも、私たちの広義の幸福においては他者（他の生）によって支えられていると言わざるをえないからである。それでは自己の生の否定とは具体的にいかなることであらうか。

「倫理は、生の否定である。ただし、生の否定が、世界肯定に奉仕する限りにおいてである。」⁽²²⁾

ここで補足するならば、以下にシュヴァイツァーが述べるように、自己の生の肯定が、自己の生の否定を媒介して、他の生の肯定へと拡張された状態を「世界肯定」と

⁽¹⁹⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Erster und Zweiter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.301.

⁽²⁰⁾ Ibid., S.31.

⁽²¹⁾ Ibid., S.303.

⁽²²⁾ Ibid., S.259.

称しているということである。

「私たちが倫理と称する高次の生の肯定は、人間が自己の現存在と共に、他の現存在を肯定することによって、自己存在から脱却することに存するのである。」⁽²³⁾

「世界肯定は、生の肯定の拡張である。私たちの生の肯定から、私たちは、私たちがそこに生きる世界を共に肯定することに到達する。生の肯定と世界の肯定から活動が生じる。」⁽²⁴⁾

このように、シュヴァイツァーは、倫理的原理の成立の可能根拠として、私たちの生への意志において、自己の生の肯定、自己の生の否定、他の生の肯定、他の生への献身的行為という一連の構造を分析していることを理解することができるのである。それでは、自己の生の肯定、他の生の肯定（他の生への献身的行為）は、どのように関連しているのであろうか。シュヴァイツァーによれば、私たちが、他者を肯定し、他者への献身的行為へと至るためには、単に他の生の肯定（他の生への献身的行為）を私たちが徒に企図するだけでなく、私たちが自己に対する正しい関係性を洞察することが要求されるのである。

「私たちの態度、行為は、他者に福利を与える意図だけでなく、私たちが自らの内に担っている、正しい人間性の理念によっても規定されている。倫理は、他者に対する正しい関係だけでなく、私たち自身に対する正しい関係でもある。」⁽²⁵⁾

つまり、シュヴァイツァーにとって倫理とは自己関係と他者関係の二重性に存するのであり、以下に彼が言うように、正しい他者関係と連関する正しい自己関係は、自己の内面的完成への要求から生じるとされる。

「内面的な完成への体験された、やむにやまれぬ要求は、生の肯定の表現である。完成への努力において、私は私の生を最高の価値へともたらしことを求める。」⁽²⁶⁾

そこで、自己の内面的な完成への要求を促進せしめる原動力がいかなるものであるかが問題になる。この原動力こそが「生への畏敬」であるが、シュヴァイツァーは、以下のように、何らかの仕方において自己を超越したものに対する生への畏敬の体験

⁽²³⁾ Ibid., S.200.

⁽²⁴⁾ Ibid., S.127.

⁽²⁵⁾ Ibid., S.130. シュヴァイツァーによれば、人間性の理念とは「個々人の存在と幸福(Glück)への配慮」を推進し、「個人が社会のように非個人的合目的的に思惟し、個人的存在をある目的のために犠牲にする」ことを承認しない心情(理念)とされる。(Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, 1923; C.H.Beck, München, 10 Aufgabe 1953, S.146-147, S.246.)

⁽²⁶⁾ Ibid., S.34.

が、自己の生への畏敬の体験と結びつくような「生への畏敬」の神秘主義を論じているのである。

「世界についての私の知は外部からの知であり、常に不完全なものである。しかし、私の生への意志からの知は、直接的であり、それは生の神秘に満ちた諸感動(Die geheimnisvollen Regungen des Lebens)にまで遡るのである。」⁽²⁷⁾

「すべての現象の背後にも、中にも生への意志が存する。ますます深く、ますます包括的となる認識とは、存在する一切が、まさに、生への意志であるという神秘(Rätselhafte)の中へと私たちを導き入れることである。」⁽²⁸⁾

このように、シュヴァイツァーは自己の生への意志（他の生への意志）の成立の神秘性を捉えているのであるが⁽²⁹⁾、彼が「すべてにおいて存在する神秘的な生への意志を前にしての畏敬(Ehrfurcht vor geheimnisvollen Willen zum Leben)で私を満たす(mich

⁽²⁷⁾ Ibid., S.201.

⁽²⁸⁾ Ibid., S.227-228.

⁽²⁹⁾ シュヴァイツァーは、倫理思想史的視点（特に、十八世紀の啓蒙主義を起点に、カント、ニーチェ、ショーペンハウアー、功利主義の思想から自己完成の倫理《生の否定の自己完成の倫理と生の肯定の自己完成の倫理》と献身の倫理の類型を抽出し、そこから、自身の神秘主義を媒介して、世界観と生命観の類型的構造を基に、自己完成の倫理と献身の倫理を統合することを試みる）をふまえて、文化観(文化の形式)による世界観と生命観の(文化の内実)の類型的構造から生への畏敬の倫理を論じている。ここで神秘主義について補足説明しておこう。シュヴァイツァーは『使徒パウロの神秘主義』の冒頭で神秘主義を以下のように一般的に規定する。「人間存在が、現世的なものと超現世的なもの、時間的なものと超時間的なものとの分裂を克服されたものとみなし、自らが現世的なものと時間的なものに在りつつ、超現世的なもの、永遠なものの中に参入するものとして体験するときそこに至るところに神秘主義が存するのである。」(Albert Schweitzer, *Die Mystik des Apostels Paulus*, Tübingen 1930, S.1.)

つまり、シュヴァイツァーは、有限な存在者である人間が何らかの方法で無限なものと交わる体験を神秘主義の本質であると考えている。ただし、シュヴァイツァーは、自身の神秘主義を倫理と密接に関連した倫理的神秘主義と考える（それとは対照的に、彼は倫理と結びつかない神秘主義を抽象的神秘主義と考える）。シュヴァイツァーは自身の倫理を「生への畏敬に動機づけられた生への献身」と規定し、生への畏敬の神秘主義と他の生の肯定（他の生への献身）が密接に関連していることを論じている。「何らかの方法で、私の生命が生命に献身するとき、私の有限な生への意志は、すべての生命が一つである無限な生への意志と一つになることを体験する。」(Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, S.233.) このように、シュヴァイツァーは、倫理的神秘主義を、有限者が無限者と直接合一することではなく、自己が他の生へ献身することにおいて他の生との結びつきを深く体験することを考察している。ここでは論じることができないが、このシュヴァイツァーの倫理的神秘主義は、イエス神秘主義、パウロのキリスト神秘主義というキリスト教思想と密接に関連して構築された議論であることを指摘しておきたい。その点については、武藤一雄『神学と宗教哲学との間』、創文社、1961年参照。

erfüllt)』⁽³⁰⁾ と言うように、自己の生（自己の生への意志）の根拠が受動的であることを示しているのである。「生への畏敬」の神秘主義の具体的内実について彼は以下のよう指摘する。

「人間は、宇宙に共属していることを深く体験することに存するのである。」⁽³¹⁾

すなわち、生への畏敬の体験は、自己の生が自己だけで孤立して存在しているのではなく、自己が他の生と連带的に関係していることを感得（共感・共同体験とも連関する）することに存するのである。そのような体験によってこそ自己の生が肯定されるのである。自己の生が他の生から孤立ないし闘争的に営まれる場合には（自他の深い連帯関係の欠如）表面的な自己肯定のみが生じ、真の自己肯定は生じえないと言えよう。そして、逆説的にも、自己の生が真に肯定されることによって、自己の悪（罪責）への反省的思惟が生ずるのである⁽³²⁾。その点についてシュヴァイツァーは以下のように言う。

「真の知は、私達の周囲を取り巻く一切が生への意志であるという神秘に捕らえられ、いかに私達が絶えず生命に罪責(Schuldig)を負っているかを洞察することである。」⁽³³⁾

このように、シュヴァイツァーは、生命相互間（人間相互間）において常に生じている罪責の反省的自覚を指摘するのであるが、自己の罪責の反省的自覚の内実こそが、自己自身に対する「誠実性」(Wahrhaftigkeit)への努力であり、先述した、自己の内的完成への要求の顕現として生じるのである⁽³⁴⁾。

⁽³⁰⁾ Ibid., S.228.

⁽³¹⁾ Ibid., S.168.

⁽³²⁾ シュヴァイツァーは生への畏敬の体験と反省的思惟の関係について『文化と倫理』において以下のように述べる。「思惟が倫理の成立において演ずる役割の問題に直面する。思惟は本能の内実を把握し、新しい首尾一貫した方法で顕在化しよう努めるのである。……生への意志そのものにおいて存する生の肯定との類比において、生への意志を促進し、かつ、その周囲に存する多種多様な形態の生の肯定を承認し、共同体験することを促進するのである。」(Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, S.210.)

⁽³³⁾ Ibid., S.246.

⁽³⁴⁾ この罪責の反省的自覚とは、彼が以下に指摘するように、生への畏敬の神秘主義の契機—やむにやまれぬ要求、憧憬、抵抗という感情—と密接に関連しているのである。「倫理とは、私が、一切の生への意志に、自己の生に対するのと同様な生への畏敬をもたらそうとする、やむにやまれぬ要求を体験することに存する。」(Ibid., S.229.)「生を維持し促進する憧憬(Sehnsucht)にますます支配されることによって、生を破棄し毀損する必然性に対して、ますます抵抗(Widerstande)することによってのみ人間は前進する。」(Ibid., S.238.) また、遺稿『生への畏敬の世界観』においても、シュヴァイツァーは生への畏敬の倫理の理性的要素と感情的要素の連関の重要性について以下のように指摘し

「内面的完成へのこのやむにやまれぬ要求の最初の感情は、誠実性への努力において自らを示すのである。」⁽³⁵⁾

ここで指摘すべきことは、「誠実性」への努力は自己の生への意志の歪みの認識から生じるということである。

「彼は、自己の生への意志の歪みとして、このような不正と高貴でないことを感じるのである。」⁽³⁶⁾

つまり、シュヴァイツァーは、自己の悪、すなわち、「嘘(Lug)、欺瞞(Trug)、偽ること(Verstellung)、策術(Hinterlist)」等⁽³⁷⁾を認識し、そのような悪（現実の自己）を克服するための努力を、内面的な完成と称するのである⁽³⁸⁾。

「内面的完成への努力は、人間が自己自身に関心を持ち、人間が高貴なものになることを欲するということを意味する。」⁽³⁹⁾

そして、この努力によって世界（自己を含めた悪に満ちた現実）から自己が内面的に自由になり、他者（自然を含む生きとし生けるものすべて）を肯定し、他者への献身的活動が生じることを、シュヴァイツァーは考察するのである。

「他の生に十分献身するために、私たちは自己自身と世界から自由になるのである。」⁽⁴⁰⁾

ここで、これまで論じたことを纏めてみよう。先に、私たちの基本的な生のあり方が、自己の生の肯定に存することをシュヴァイツァーに即してみてきたが、彼は、単なる自己の生の肯定のみでは真の自己の生の肯定は顕にならず、他の生の肯定（他の

ている。「私たちが感情と称するものは、思惟においてもきわめて重要な役割を果たしている。……ただ非調和的な人間においてのみ感情と思惟は相互に矛盾する。」(Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., S.28)

⁽³⁵⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.266.

⁽³⁶⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Erster und Zweiter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.200.

⁽³⁷⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.34.

⁽³⁸⁾ シュヴァイツァーは、以下のように、このような状況に私たちが陥るのは、外面的な環境（状況）に屈してしまう点にあると考えている。「影響に屈服することによって、人間は不誠実、嫉妬、復讐心、そして、総じて各々の低劣な心情に陥るのである。」(Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Erster und Zweiter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.200.)

⁽³⁹⁾ Ibid., S.349.

⁽⁴⁰⁾ Ibid., S.259.

生への献身)と真の自己の生の肯定が相関していることを強調する。そして、自己の生の肯定と他の生の肯定を媒介するものが「生への畏敬」の神秘主義なのである。それは、自己の生と他の生(一切の生)が深く結びついていることを感得することに存するが、そのような他の生との信頼的な結合を感得することこそが真の自己の生の肯定することの第一歩になるのである。逆説的に言えば、自己の生が他の生との結びつきを感得しえないならば、自己の生は孤立し、真の意味における自己の生の肯定は生じえないと言えよう。そして、生への畏敬に基づく真の自己の生の肯定から、自己の罪責(悪)への思索が生じ、自己の内面的完成(自己への誠実性)への努力が発動し、そこから、他の生の肯定(他の生への献身的活動)へと至るのである。

シュヴァイツァーにとって倫理とは、単に他の生の肯定(他の生への献身)だけに属する事柄ではなく、自己の罪責(悪)の認識、そこから脱却することへの努力にも属する事象でもある。他の生への献身と自己の罪責の克服への努力はまさに表裏一体なのである。生への畏敬に基づく自己の内面的完成の努力にこそ他者の生の肯定と結びつきうる真の自己否定的契機ともいべき真の自己肯定が存すると言えよう。換言するならば、シュヴァイツァーが論じる他者肯定(他者への献身)は、いわば功利主義的な自己肯定の裏返しとしての他者肯定ではなく、自己の内面的完成への努力と他者肯定が不即不離だと言っているのである。その点について彼は以下のように指摘している。

「倫理的なものは単なる献身に存するのではない。この献身のモチーフと並んで、倫理において、内的完成のモチーフが始めから現存しているのである。」「献身のモチーフと内的完成のモチーフは相互に関係しているのである。」⁽⁴¹⁾

「完成の倫理と献身の倫理は、二つの離れ離れになっている山ではない。」⁽⁴²⁾

すなわち、シュヴァイツァーが構築する倫理には、献身的要素と内的完成的要素の「二焦点(zwei Brennpunkte)」⁽⁴³⁾が各々単独で存するのではなく、両者が分かち難く結合していることを理解することができるのである。換言するならば、内的完成の倫理と献身の倫理は、原初的に、前者と後者が分離した形で存し、二次的に、両者が結びつくのではなく、内的完成の倫理と献身の倫理の相関関係が先構造として存し、内的

⁽⁴¹⁾ Ibid., S.266.

⁽⁴²⁾ Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Erster und zweiter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.248.

⁽⁴³⁾ Ibid., S.200.

完成の倫理と献身の倫理の特性を説明するために、両者を分離してシュヴァイツァーが考察していると解釈しうるのである⁽⁴⁴⁾。

そして、生への畏敬に基づく自己への「誠実性」の努力が、他の生の肯定し（他の生への献身）と結びつくときにこそ最も充足した幸福を体験するとされる。つまり、シュヴァイツァーは、偶然的な幸福ではない永続性が存する真の幸福を考察しているのである。

「真の幸福は、私たちの本質の最も内面的なものの体験であり、真の正しい行為は、私たちの最も本質的なものからの心情の活動である。」⁽⁴⁵⁾

エゴイズム的な自己幸福のみの追求からは一時的な幸福を得ることはできても、真の幸福には至りえないことは以下のシュヴァイツァーの引用文からも傍証することが可能である。

「自己だけで生きぬくことは満足することができない。それによって生じる快楽は退屈で持続的でない。…… エゴイズム的に自己を生きることは私たちの現存在に内実を与えることはできない。それは、私たちが、そこにおいて感覚の麻痺を求める消耗する体験である。」⁽⁴⁶⁾

すなわち、シュヴァイツァーは、生への畏敬による真の自己肯定、そこから生ずる自己の罪責への認識（それと関連した自己の罪責からの脱却への努力）の存しない、自己幸福の飽くなき追求からは、真の自己肯定を得ることがなく、自己の生が虚無へと陥らざるをえないことを洞察するのである。エゴイズム的な自己幸福の追求によっては表面的な幸福を得ることは可能でも、真の幸福を得ることとは程遠いと言えよう。

確かに、私たちの現実、拭い難い罪責（悪）に覆われ、自己への誠実性の努力においても、エゴイズムを完全に脱却することができないので、自己肯定及び、それと

⁽⁴⁴⁾ シュヴァイツァーは既刊著作『文化と倫理』において、自己完成の倫理の系譜（カント、ニーチェ、ショーペンハウアー等）と献身の倫理の系譜（功利主義思想）について論じているが、両者の関係性について詳細に説明していない。その点において遺稿を確認する意義があると思われる。シュヴァイツァーの倫理の構築において、純粋な内的完成の倫理、純粋な献身の倫理が存しえないことを、以下においても確認することができる。「人類の思惟においては二つの一面的な生命観(*Lebensanschauungen*)が登場する。一方においては完成の思想が支配的であり、活動の思想が意味を喪失する。他方においては、活動の思想が完成の思想を抑圧する。」(Ibid., S.200.)

⁽⁴⁵⁾ Ibid., S.25.

⁽⁴⁶⁾ Ibid., S.182.

相関する他者肯定も不完全なものとならざるをえない⁽⁴⁷⁾。しかし、シュヴァイツァーは、このような人間の困難をも考慮に入れた上で、自己の内面的完成（自己への誠実性）への努力から、たとえ不完全であろうとも他者肯定（他者への献身）を行じなければならぬと考えるのである—まさにこのプロセスこそが真の幸福への道であると彼は考察しているのであるが—⁽⁴⁸⁾。

以上より、シュヴァイツァーにおいて倫理と幸福は各々単独で存するのではなく、すなわち、倫理は他者肯定（他者献身）のみ、幸福は自己肯定にのみに関係するのではなく、生への畏敬の媒介によって倫理と幸福の両者が共に分かちがたく結びついていくことを明確化した—自己の誠実性への努力と他者献身が表裏一体となった倫理こそが真の幸福を生み出すということ—。

結びにかえて

最後に若干の補足を説明しておこう。シュヴァイツァーの倫理の構想は、個人としての自己が、個人としての他者に対する献身を行ずる帰結を生み出すことは当然のこととであるが、そのみに留まらず、そこを起点に、個人としての他者肯定を第一義的に目的とした、社会制度の改革（物質的自由の解放による他者への間接的な献身）を承認しているということである。

「私たちは経済的社会的問題を熱心に取り上げる。できる限り多くの人に、できる限り高度の物質的自由ということが、私たちにとって文化の一つの要求である。」⁽⁴⁹⁾

「経済的正義において私たちは相互に理解しなければならないが、経済的正義の基準を与えることができるのは、生への畏敬のみである。こうした展開を実現することが私たちに可能であろうか。私たちが相互に物質的精神的に滅亡したくないなら

⁽⁴⁷⁾ その点について、シュヴァイツァーは以下のように指摘する。「私たちは日毎、倫理の領域の限界のなさの苦い体験をする。……いかなる熟考においても、私たちが、私たちが関わるべき人間に責任があるか、もはや責任がないかについての平安な洞察には至りえないのである。」(Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.272- 273.)

⁽⁴⁸⁾ その点について、シュヴァイツァーは遺稿において以下のように指摘する。「私たちは、このような見込みのないことを意志し、遂行する力を内面的完成へのやむにやまれぬ要求においてのみ見出すのである。」(Ibid., S.267.)

⁽⁴⁹⁾ Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, 1923; C.H.Beck, München, 10. Auflage 1953, S.257.

ば私たちはこれを実現しなければならない。」⁽⁵⁰⁾

シュヴァイツァーの倫理においては、個人倫理だけが存するのみで社会倫理が存しないという批判も指摘されるが⁽⁵¹⁾、上述の引用文からそのような主張は妥当しないことが明らかであろう。すなわち、シュヴァイツァーも社会制度の問題に関心を有するのである。彼が（物質的自由の解放の要素が強い）制度改革を積極的に肯定しない理由は、単なる社会制度改革においては、（精神的自由の担い手ともいうべき）個人を蔑ろにした社会制度の改革を企図する可能性を有するからである。つまり、彼は、個人を蔑ろにした制度改革においては、個人の生の意味性の喪失一生への畏敬に基づく自己肯定と他者肯定の喪失とも言うべき一を招来せざるをえないので、単なる社会制度改革を承認しないのである。このようにシュヴァイツァーは幸福論を構築する際に、物質的自由の要素と精神的自由の要素の両者を射程に入れて論ずるのである⁽⁵²⁾。ここでは具体的に論じることはできないが、このようなシュヴァイツァーの主張は植民地アフリカの社会問題における実践（罪責の問題と連関する精神的自由の解放の要素と物質的自由の解放の要素が密接に連関した）において裏打ちされているのである⁽⁵³⁾。

「私たちと私たちの文化には、大きな罪がのしかかっている。向こうの人々（アフリカの人々）に善事をなすことを欲するか、欲しないかは、私たちは全く自由ではないのである。私たちは善事をなさねばならないのである。私たちが彼らに善事をなすところのものは、善事ではなく罪の贖いである。」⁽⁵⁵⁾

⁽⁵⁰⁾ Ibid., S.258.

⁽⁵¹⁾ H.Clark, *The philosophy of Albert Schweitzer*.

⁽⁵²⁾ シュヴァイツァーは、カントにおいては倫理が精神化され、功利主義においては物質化されているが、倫理には精神と物質が共属している旨について言及している。つまり、シュヴァイツァーは倫理（幸福）における精神的自由を軸足をおきつつも、倫理（幸福）には精神的自由と物質的自由の両者が必要であると考えている。また、そこにおいて、カントの動機説と功利主義の帰結主義の問題も孕んでいると思われる。Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, kulturphilosophie III*, Dritter und Vierter Teil., C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München 2000, S.183.

⁽⁵³⁾ シュヴァイツァーは以下のように罪責の問題（自己への誠実性）を通じて自己と他者が連帯する倫理を構築することを試みる。「何らかの仕方で生命を毀損する私は、倫理において存せず、私の存在あるいは幸福を維持するために利己的に罪責があるにせよ、多数の他の存在あるいは幸福を維持するために非利己的に罪責があるにせよ、いずれにせよ私には罪責があるのである。」(Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, 1923; C.H.Beck, München, 10. Auflage 1953, S.246.)

また、シュヴァイツァー倫理思想におけるアフリカの社会問題については以下の文献を参照。Clemens Frey, *Albert-Schweitzer-Studien* 4, S.179-203.

⁽⁵⁵⁾ Albert Schweitzer, *Zwischen Wasser und Urwald*, S.205.

このように、シュヴァイツァーの生への畏敬の倫理には精神的要素のみならず物質的自由の解放への射程を有しているのである。シュヴァイツァー思想の現代的意義について付言しておくならば、自己の生が他のすべての生命体と連帯していることを感得することを主眼目とする生への畏敬の倫理は、私たちの生の自己中心的な欲望のあくなき追究（科学技術による過度の文化的生の構築）に対して、他の生の犠牲の上に成立していることを認識せしめ、これまでの生き方に対して反省を迫り、他の生命体に対する個人の自覚的責任を喚起する倫理であると思われる。その意味において、生への畏敬の倫理は、グローバルな環境問題の危機を解決しうる視座を有すると言えよう⁽⁵⁶⁾。本論においては、自己の内的完成と他者献身の相関構造における、精神的自由の要素と物質的自由の要素との関係性について詳細に論じることができなかったのも、その点については今後の課題としたい。

キーワード

シュヴァイツァー、幸福と倫理の関係性、生への畏敬

(Keywords)

Schweitzer, happiness-ethics relationship, Reverence for Life

⁽⁵⁶⁾ シュヴァイツァーにおける現代の倫理的課題については以下の文献を参照。芦名定道「シュヴァイツァーと現代神学の生命観」『シュヴァイツァー研究』第 22 号、1994 年。野呂芳男『実存論的神学と倫理』、創文社、1970 年。富坂キリスト教センター編『エコロジーとキリスト教』、新教出版会。The Ethik of Albert Schweitzer for the Twenty-first Century. Reverence for Life, Syracuse University Press 2002. Erich Grässer, The Significance of Reverence for Life Today. Mike W. Martin, Rethinking Reverence for Life.